

郷土室だより

郷土室だより今昔

◇いささかオーバー?

昭和四八年六月にこの『郷土室だより』が創刊されてから、この号で六八号目になります。そしてこの間の歳月は「足かけ」一八年を数えます。

「人類の歴史」という具合に大上段にこまえなくても、今年は徳川家康が江戸に来てからちょうど四百年目。

江戸が東京に変わってからも一二年もたちます。こうした時間の尺度からみれば、『郷土室だより』の「足かけ一八年」は「短い」期間だといえましょう。

このわずかな歳月を、ことさらに「今昔」と呼んだのは、いわゆる郷土、つまり「ふるさと」としての中央区が、この歳月の中で実に大きく変わったことへの感慨があります。

その代表的な例をあげますと、かつては江戸前の海に直結していた湊町中央区が、いつの間にか隅田川の河口部ならぬ「中流部」の都市計画である大川端リバーシティ21の壮大な舞台になった驚き。

「足かけ一八年」前の昭和四〇年代までは勝鬨橋の下には、まだまだ豊かな「海」がたゆたっていました。橋の上の大空もひろびろと、お台場から富士山までつらなれた空間でした。

——東京湾の埋め立てが進み、ウォーターフロントの開発によって、年々中央区の水ぎ

わから海が遠ざかり、大空は隅田川上空だけの「細空」になってしまいました——このような「今昔」の感は、「ふるさと中央区」が、現代都市化していくための、当然な変化として受け止めていくものなのでしょう。

◇「郷土室だより」の舞台

それはさておき、この「郷土室だより」の当事者としての「今昔」感も、また大きなものがあります。

『郷土室だより』を発案し、昭和六一年まで一人で執筆を担当されたのは故安藤菊二先生でした。先生の業績は数多くありますが、『郷土室だより』に限れば、一八号までは「薬研堀周辺居住の検校」・「中央区と演劇」・「地下の埋蔵物」・「采女町史談」・「木挽町居住の名家」・「仙台藩医工藤周庵の生活」・「弓町の観世屋敷」・「築地地区の蔵屋敷」といった内容で、いわば項目別に『中央区史』などで採録しきれなかった区内の事物と事項の紹介を続けられました。

ついで九一三号では「中央区名所名物句集」①⑤を連載。四季折々の風光と、そこに生活する人々の人情の機微を、非常に多くの句集から抜き出され、しかも解説つきで紹介されました。

さらに一四一四〇号では「切絵図考証」①②を連載。切絵図とは江戸全図を携帯や読図の便利のため、ある地域ごとに現在の「区分図」のように範囲を限った——切った——地図のことですが、「切絵図考証」はその切

絵図をさらに細分して、区内全域にわたってそれぞれの地域の特性や住民・事件などを具体的に、古風ないい方になります。「まるで掌を指すように」臨場感あふれる解説を続けられました。

そして四一五三号までは「八町堀裸記」①③を連載。江戸の武家地の中でも、他に類例をみない町方の与力・同心の集住地帯でもあり、同時に学者・医師・絵師たちの町でもあった八町堀の細部の紹介を続けられ、途中で発病中断となったものです。

◇地域の中の地域

このように見てきますと、『郷土室だより』の筆者は、一貫して江戸以来の都心地域である中央区そのものと、さらにその中におのずから形成された小地域の姿を、追い続けてきたことがわかります。

いい方を変えれば、中央区の地域にさまざまな角度から光を当てて、そこにはさらに多様な小地域が存在することを知らせてくれました。

これは「ふるさと中央区」のあり方について、時間的にも空間的にもそのディテール Detail を求めることを通じて、江戸—東京の全体像が浮きあがってくる方法でもありました。

そしてこのような「ネライ」を秘め

たのが一三年、五三回におよぶ連載だったのです。

◇筆者交替

病氣中断以後の『郷土室だより』は、これも京橋図書館の『名物』として知られている「東京を語る会」の講演を五五～五九号の五回にわたり収録したのち、六〇号以後は「中断」以前の各号の記事を再掲する形で「埋もれた文化財」①③、つづいて「埋もれた記録」①④と、安藤先生の遺産を掲載してきました。

しかし、それにも限りがあるわけで、この号から新しい筆者が登場しました。そして従来の『郷土室だより』のスタイルを受けついで、中央区のものもの『ディテール』を追究して行くことにしました。

◇一七メートルの帆檣

ヨットやウィンド・サーフィンなどで代表される、帆を利用したマリンスポーツが随分盛んです。かつては中央区の「海」だったお台場臨海公園あたりでは、色とりどりの花びらが浮いたように、たくさんの「帆」が海上を走りまわっています。

そうした「帆」のイメージからすると、ひどく巨大な——長さ一七メートル

もの大きな帆柱が、銀座の地下から発見された話が、今回の話題です。

一七メートルの帆柱というと、平均的なビルの高さでいえば四～五階分もある高さです。

直接、この発見物語に入る前に、まず『郷土室だより』第3号（昭和四九年一月発行）をみますと、その号は「地下の埋蔵物」に関する、二つの発掘報告がとりあげられています。

一つは本町三十四（旧大伝馬町一・二七）の静岡銀行日本橋支店の建設工事現場から発見された、江戸時代の地下倉庫と考えられる構築物の石組みと、その基礎の木杭についての報告でした。

もう一つは京橋小学校の北側の現N T Tの京橋会館建設工事現場から発見された人骨・木杭・巨石・石積み・水道の木管などの出土物に関するものでした。

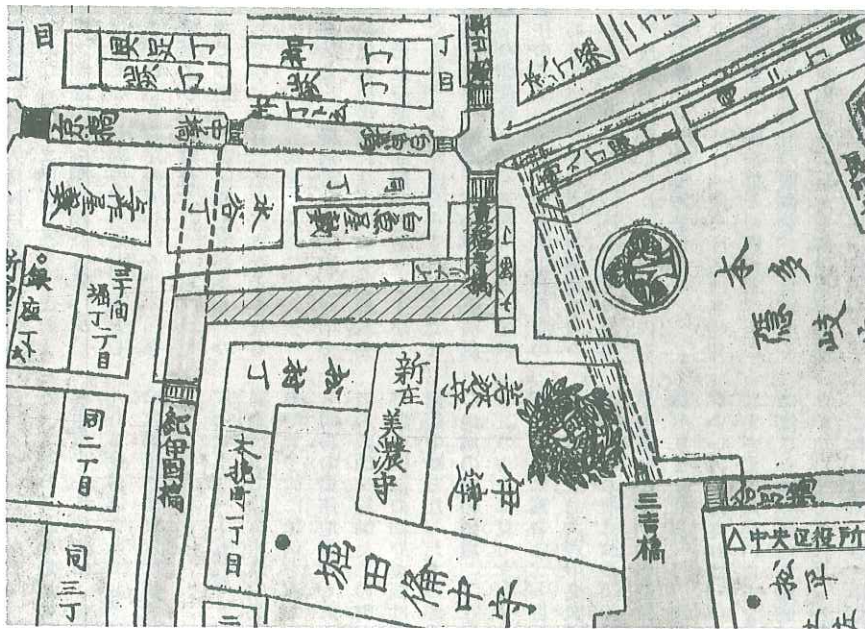
この京橋会館の場所について、第3号はつぎのように述べています。

この辺は震災後の区画整理で大変動のあった所である。明治三十九年までは白魚橋・真福寺橋の所で分岐した三十間堀川が、大富町のあさり河岸の南端で直角に西に折れ、白魚河岸に沿って銀座一丁目裏に出て、更に屈折し南走して汐留川に合流して

いた（後略）

と、まず明治三十九年（一九〇六）の三十間堀川の改修前の川筋を説明してから、昭和四九年までの変化の状況を

説明しています。これを平成二年五月に刊行された『郷土室だより』付録地図（旧京橋区の部）の四枚の地図から合成したものが第一図です。



三十間堀川の変遷

明治39年の新掘部分 四年の埋立部分

(元図は嘉永2年版「築地八丁目日本橋南絵図」)

震災後開削された水路（現高速道路）

図にみるように、三十間堀川をはじめ、それにつらなる京橋川・楓川・桜川（本来の八丁堀）、さらに震災後の復興事業による真福寺橋―三吉橋間の、築地川に連絡する運河の新設など、目まぐるしく変化していることがわかります。

そしていまは、これらの水路はすべて埋め立てられ、旧三十間堀川と桜川の一部分のほかは、高速道路になってしまいました。

◇ふたたび第3号

京橋会館建設工事現場からの出土物の知らせを受けた、第3号の筆者は、「私はすぐに、明治三十九年に三十間堀川の埋立新掘工事の際に、水谷町一現、銀座一丁目八番地辺（引用者注 住居表示以後は銀座一―一と一二辺）で、巨石や人骨・帆柱などの発掘されていることを想起した。」

と述べています。筆者は明治四三年生れですから、発掘現場を見たことはないわけで、「想起」の「タネ」はつぎに紹介する史料だったことがわかります。

それはこの三十間堀川改修を担当した東京市土木課技手の吉田信近が、土

木課長にあてた報告書でした。この報告書はいまも東京都が編集と発行を続けている『東京市史稿』の港湾篇第一（大正一五年刊行）に収められていす。これをここに紹介するにさいして、まず現代風に要約しようと思いましたが、『東京市史稿』収録のさいにすでに原文が三カ所省略されており、添付された図面も省略されていました。ですからこれ以上要約したら、当時の雰囲気がかわれてしまいますので、読みやすくするために原文の片カナを平仮名に、また適当に振りがなをつけてみました。

報告書

明治卅九年一月以降、東京市京橋区水谷町地先より、銀座街頭に沿い、卅間堀川を整理せんがため、目下開削中の所、本線（百五十七）の中央より稍や南方にて零下二尺（すなわち地表より下、十五尺）の所に於て、五月中旬頃より古船材料数片を発掘し、就中その帆樫の如きは、杉の赤身材にて長さ八間五分八厘、元口一尺角にて、末口五寸角のもの一本露出したるは、これ卑職の少しく異様に感ずる所の第一也。特に其樫の元口より立上り五間七分八厘の一点より兩断せられ、併も其樫口の整

然として乱れず、兩々相重なりて葬られあるは、是又異様に感ずる所の第二也とす。（中略）

今仮に其の巨大なる帆樫（この巨樫を塔載する船舶は、少くも千石積以上のもの）が咄嗟の間、すなわち危機一髪の際に会し、截断せられたるものとせば、其の樫口の如何に高くして且余りに巧調に過ぎたる感なき能はず。特に一考に値すべきは、其の破片に焼痕の点々と存在するもの是なり。

要するに海上怒濤に翻弄せられ、其の際火災を起し、適ま岸角に触れ沈没したるものにあらざるなき歟（中略）。尚其の船具の存在せる西南数歩にて、一つの櫓體を發掘せり。一警男性にて、年齢四十前後なるべく、是亦一考に値す可きものなる歟。以上埋没の個所及び周囲の状況より推考するに、無慮三百年以上を経過したるものならん。尚考古学上、大いに値すべきは、右の船具を發掘したる北方の三間許にて、巨大なる不規則の長方形の古石七個を發見したる是なり。（大は二千四百貫目より、小は千貫目前後あり）別紙図面の如く、点々東西に延び、槩に人工を以て配列せられたるものなり。惟うに此処は元海陸の境界線にし

て、其海岸の防護的に配列したるものと覺敷く、従て今の新湊町、新富町、木挽町、築地、南小田原町及び新佃、月島附近は一帯海なるべく、大船巨舶の常に出入し能う可んば、難破等自然免る可らざるの理勢なりしを察知するに足れり。特に右古石は七個共同質にて近県より産出したるものにあらず。或は当時天下の諸侯、自国の特産名石を貢獻したる一部分にあらざる莫き歟と思料するも、亦強ち附会の言には非ざる可し。（中略）

明治卅九年六月廿八日

技手 吉田信近
土木課長土方篠三郎殿

『東京市史稿』にはこの報告書に続いて、当時の東京帝国大学史料編纂所（現東大史料編纂所）の編纂官三上参次名で、東京市長に対して発掘内容を照会する文書が出され、東京市は八月六日づけで尾崎行雄市長名の次のような回答文書を掲載しています。

- 一、掘削工事箇所 京橋区水谷町より銀座一丁目を経て三十間堀川に至る間。
- 一、発掘したる石の位置 京橋区水谷町別紙図面〔略〕記載箇所。

一、発見したる月日 六月中旬。

一、石の位置は地下幾尺位 約十五尺(約五m、以下()は引用者)。

一、石の排列方向 別紙図面所載の通り。

一、石の数 七個。

一、石の重さ 約壹千貫より二千四百貫(三・七五トンより九トンから九・三七五トン前後の重さ)。

一、石の大きさ 大は長七尺、厚三尺、幅六尺(約二・三m×一m×二m)より、小は長五尺、幅四尺、厚二尺五寸(約一・六五m×一・三m×〇・八m)位まで。

一、石の質 相州産堅石に類似す。

この発掘と出土品について、当時の東大史料編纂所の関心は石だけに限られているのに対して、吉田技手の報告は「巨大な帆樫」の分断状況にはじまり、その視角は現在の考古学の関心の広さに相当します。

考古学といえは、いわゆる無土器時代に始まり、縄紋・弥生時代から下っても古墳時代までが、その研究対象に限られていた期間が随分長く続きました。

東京の場合、近世都市江戸を対象に組織的な考古学的調査が始められたのは昭和五十一年に中央区と千代田区の区境にある都立一橋高校遺跡の「大発掘調査」が最初だったことを「想起」しますと、この八四年前の吉田技手の報告書は、非常に「先進的」な報告だったといえましよう。

◇帆樫への疑問

吉田技手の長さ一七mの巨材への疑問を改めて書きなおしてみますと、第一はなぜこんな巨材や巨石が、水谷町あたりの地下から出てきたのか？ 第二は巨材を帆柱とした場合、柱の根元の太さは〇・三三m、先端の太さは約〇・一六五mあります。

そして根元から約一・四mの高さの所——この部分の太さは直経約〇・二二mあるわけですが、「截口の整然として乱れず」ですから、ちょうど包丁でダイコンをスパッと切ったような状態だったわけで、一・一mもの高さの所で一体どんな刃物を使って、スパッと切ったのかという疑問を書いていきます。そして約一・一mと約六mの二本に切られた巨材が「両々相重なりて」埋まっていたといえます。またその二本に点々と焼ごげの跡があることに注目

して、結論として海上の荒波にもまわっているうちに船火事を起し、積んでいた巨石とともに当時海岸だった水谷町あたりに打ち上げられて沈没したものと推定しています。

つまり三十間堀川の線が当時の海岸線であり、それより東側は全部海であり「大船巨船」が常に入出入りできた「理勢」にあったと推察しています。

◇墳築と中央区の海岸線の原形

吉田技手の報告から六五年後の昭和四十六年、かつての発見現場に隣り合っており、同じような出土物が出たのです。第3号は旧水谷町と京橋会館の位置関係を「歩幅三百数十歩を隔るに過ぎない」と、簡潔にひと続きの海岸線だったという見解を含めた表現をしました。

さて旧水谷町の現場の巨石は、明治三十九年当時の結論では「慶長八年(一六〇三)の豊島洲崎の墳築の際に築いた防波堤の礎石」と見るのが「学者の一致した意見」だとあり、吉田報告の難破説は何故か消えてしまいました。

京橋会館現場の巨石については、第3号は多くの条件を総合して「慶長八年の大埋立工事の際、護岸のために据えられた基礎石と考えてまず誤まるまい」と述べています。

江戸—東京の歴史的史料を集めた『東京市史稿』の、とくに明治・大正期に発行された分には、当時の独特な表現があります。その好例が「慶長八年の豊島洲崎の墳築」です。

普通「洲崎」といえば潮の干満に見えかくれする砂浜海岸の砂洲を意味します。さらに墳築の墳は「うめる」または「うずめる」という意味で、築は「きづく」、「つみあげる」という意味です。直訳的にいえば「豊島の砂浜の砂洲を埋め立てて陸地を造成」する作業が「豊島洲崎の墳築」なのですが、この豊島洲崎の具体的な位置や形状は文章表現の上では、あまりはっきりしないものでした。

しかし吉田報告にもあるように旧京橋区の範囲では三十間堀川の線が海岸線だったことは、かなり広く知られていたことでした。やがてこの海岸線から東側一帯に「築地」が埋め立てられるのですが、その時点は必ずしも慶長八年ではなかったようです。(この項つづく) (筆者——三芳(三芳) 巨)

◇三芳 巨先生御紹介

故安藤先生のパトンを受けて登場の三芳先生は、T・W・F(東京ウォーターフロント史学会)理事で、ウォーターフロント成立史の研究者です。